

五井先生解説の般若心経をよりよく理解する資料

(平成二十八年六月吉日作成)

神界に座を置く

高嶋善二郎

目次

釈尊の宇宙人間観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	悪因縁を善因縁に変える宇宙子科学・・・・・・・・・・・・・・・・	21
「この世の知識では解明できない概念」空「空」・・・・・・・・	5	自らの直観力を磨き、チャクラを開く・・・・・・・・・・・・・・・・	22
人間とは壮大なる使命を帯びた神の分霊（魂）・・・・・・・・	6	すべてが神性を顕現するプロセス・・・・・・・・・・・・・・・・	23
人間に偉大なる使命を忘れさせた思い方・・・・・・・・	9		
この肉体界に神界の本体を現わす智慧・・・・・・・・	10		
神界に座を置く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11		
物質界の業生の波を超えている自分・・・・・・・・	13		
本源の世界の自分を愛する・・・・・・・・・・・・・・・・	15		
実在世界の神のみ元にたどりつける言葉・・・・・・・・	16		
現在の想念意識を守護霊守護神に向ける・・・・・・・・	17		
個人人類同時成道の背景・・・・・・・・・・・・・・・・	20		

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせします。

(電話) 04-71-21-3752

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

釈尊の宇宙人間観

最近、般若心経の解釈について、多くの書籍が出版されています。

般若心経は、今から約二千五百年前、釈尊が十大弟子の一人の舍利弗（しゃりほつ）に対して、観世音菩薩が深い最高の統一に入って、正しい覚り、つまり正覚（しょうかく）を得た宇宙観、人間観を説いたものです。経のなかでは、観世音菩薩が説かれているのですが、これは釈尊自身の正覚を観世音菩薩の覚りとして説いているのです。

最近出版されている書籍の代表的な解釈として、この世は実体がなく、諸行無常であり、すべてはあるようでないといったものや、お釈迦さまは私たちに感謝することを教えられたのであると、自分の目の前に現われるものを感じ、すべて受け入れることができれば、自分の願望は叶い、運命も改善されるのであると、説明するものもあります。しかし、諸行無常のこの世を、何を拠り所にして生きていけばよいか説得できるものが示されていませんし、また、何故感謝し、受け入れることができれば願いは叶うのか、またどのようしたら自分の目の前に現われるものを感じ、すべて受け入れることができるのかは説明されていません。これらの説明を読んで、心より「そうか」と理解できる人はすくないのではないのでしょうか。

この解釈に対して、五井先生は、どのように言われているのでしょうか。要点を整理しますと、次のようになります。

この肉体界は、神界（実在界）の現身（うつしみ）であり、顛倒（てんどう）（夢想）（肉体世界は実在であり、すべてであるという幻想と錯覚）を離れて、その真理を明らかにしていけば（即ち自分の本体は神界にあるという自覚をもち、その視点からすべてを解釈して、生きてゆけば）この肉体を持ったまま自由自在心を得る、即ち大悟を開くことができ、すべて（死、生、老、苦など）に把われ（とらわれ）がなくなるということになります。

このことを頭に入れていただき、般若心経の訳をみてみましょう。

般若心経

観自在菩薩、深般若波羅蜜多を行じしとき、五蘊（ごん）（うつしみ）皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまえり。

観自在菩薩、最高の統一である般若波羅蜜多（正覚行）の行に入り、五蘊（ごん）（うつしみ）：注一）は真の空（神界、実在の世界）の現身（うつしみ）であることを照らす。それにより長い間さまよひまな修行を怠る者は、煩惱の中から正覚を得る。

注一）五蘊—色受想行識という、物質と心が作り出す現象界、肉体界（五感）、幽界（六感）

舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色は即ちこれ空、空は即ちこれ色なり。受想行識もまたかくの如し。

舍利子よ、この現象界、肉体界（五感）、幽界（六感）のすべてのもの（色）は、眞の空（神界、実在の世界）の現身（うつしみ）にほかならないのである。この現象界、肉体界（五感）、幽界（六感）のすべてのもの（色）を空と断じ切るべし、その奥に眞の空（神界、実在の世界）が現れてくるのである。眞の空（神界、実在の世界）になった瞬間に現象世界の仮相の色（もの）の世界が、すべて光明燦然たる実在、宇宙に満ちる存在の種種なる使命的な光（色）として存在してくるのである。

また、受想行識（注二）もかくのことである。

（注二）受想行識—感覚器官等を通して入ってきて形成される意識

舍利子よ、この諸法は空相にして、生ぜず、滅せず、垢つかず、淨からず、増えず、減せず

舍利子よ、眞の空とは、生ずることも消滅することも把われることがない。垢にも、淨まることも把われることがない。また増やすことも、減ることも把われることがない。

是の故に空の中には色もなく、受も想も行も識もなく、眼も耳も鼻も舌も意もなく、色も声も香も味も触も法もなく、限界もなく、乃至意識界もなし。

故に眞の空（神界、実在の世界）には、人の持つ感覚器官の対象となる物質や現象が、その感覚器官を通して入ってきて形成される意識にもすべて把われることがないのである。

無明も無く、また、無明の尽くることもなし。乃至、老も死もなく、また、老と死の尽くることもなし。苦も集も滅も道もなく、

また、無明という迷いにも把われることがなく、また無明という執着がつきることにも把われることがなく、さらに老死という因縁にも把われることがなく、また老死という輪廻が尽きることも把われることがない。苦にも把われることがなく、苦の因にも把われることがなく、苦が滅することにも把われることがなく、その道にも把われることがない。

智もなく、また、得もなし。得る所なきを以ての故に

自分には、本来すべてが欠けることなく備わっているということがわかってるので、他に求める智もなく、他から得ようとすることもない。

菩提薩垂は、般若波羅蜜多に依るが故に心に罪礎（けいげ）なし。罪礎なきが故に恐怖あることなく、一切の顛倒夢想を遠離して涅槃を究意す。三世諸仏も般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提、あのくたらさんみやくさんぼだい」を得たまえり。

修行の菩薩は、すべてのすべての引っかかりや把われを無、無、無と切って切って切り抜いて成し遂げた最高の統一である般若波羅蜜多（正覚行）の行によつて心に妨げも把われもなく恐れもなく、一切の顛倒（んどう）（夢想）（注三）を離れ、神界（実在界）の境地（自由自在の境地）

に達する。過去、現在、未来の三世の諸仏も般若の智慧によって阿耨多羅三藐三菩提という思議を越える正覺の世界を現わし、宇宙にひろげる。(注三)顛倒(てんどう)(夢想—肉体世界は実在であり、すべてであるという幻想と錯覚

故に知るべし、般若波羅蜜多はこれ大神呪なり。これ大明呪なり、これ無上呪なり、これ無等等呪なり。よく一切の苦を除き、眞實にして虚ならず。故に、

故に最高の統一である般若波羅蜜多(正覺行)の行は眞實と知るべきである。これこの眞言は、偉大なる神秘の言葉であり、その神秘を明らかにする眞實語であり、限り無い無上を示す言葉であり、比類なき輝きを放つ眞言であり、一切の苦しみと災厄を除く。

般若波羅蜜多の呪を説く。即ち呪を説いて曰く。羯諦(きやくてい)、羯諦(きやくてい)、波羅羯諦(はらきやくてい)、波羅僧羯諦(はらそうきやくてい)、菩提薩埵(ぼだいそわか)般若心経

般若波羅蜜多の眞言を説く。明らかにせよ、眞理を明らかにせよ、おすれば、神界に昇れるのだよ。

この般若心経の訳を見ていて、いくつかの疑問をお持ちになったかと思えます。

原文では、「この諸法は空相にして、生ぜず、滅せず、垢つかず、淨か

らず、増さず、減せず」などすべてがないとあるのに、何故「把われることがなく」となっているのか。

これについては、五井先生が解釈された文献がないため、解釈されている文献内容から私の方で類推して整理しました。その類推の仕方は、次のとおりです。神界では、破壊と創造が同時に行われるので、変化が存在しないが、この肉体界では、この両者には時間差が存在しているので、変化が存在する。消えてゆく姿が存在する。この肉体界で自由自在の境地に達した人ならどのように表現されるかといった観点から「把われることがない」としました。

そのほか、次のような疑問をお持ちになったのではないのでしょうか。
第一に、空という概念はどういうものなのか。
第二に、この肉体界は神界(実在界)の現身(うつしみ)というが、このことはどういうことなのか。

第三に、顛倒(てんどう)(夢想を離れるとあるが、顛倒(てんどう)夢想とはどういふことだ説かれているのか。
第四に、眞言を唱えるだけで、空という心境を体得できるのか。
以上について、五井先生は、どのように説かれているのでしょうか。

この世の知識とは解明できない概念「空」

昔の解釈と五井先生のそれとで最も相違するところは、「空」という概念であります。それについて、次のように言われています。

「眞の空とは、すべての現われに絶対に把われない境地になる

ことをいいます。普通肉体人間があると思うすべてを無しと捨てきらしているのです。統一の最高境地には、肉体観念はもちろぬ幽体観念、霊体観念を解脱しえた宇宙即自我、自我即真理という境地があります。この境地は何にも無いということではなく、空空漠々という境地ではないのです。自己の中に一切があり、一切の中に自己がある。即ち実在そのものという境地なのです。

その境地を釈尊は空即是色といっているのです。色即是空で空になって、空になった瞬間に現象世界の仮相の色（もの）の世界が、すべて光明燦然たる実在、宇宙に満ちる存在の種種なる使命的光（色）として存在してくる。つまり色即是空という色と空即是色という色とは往相と還相の違いであり、仮相の色（もの）と実相の色（光）との相違なのです。五感六感（肉体幽界）で見えるすべての色（もの）を空と切ったとき、この色（もの）は実在と業因縁との混合物として、現われていたので、一度、一切を空と断ち切る、すなわちこの現象のすべてからの把われを捨て切る、現象という幕を切り捨てると、その瞬間改めてこの世がそのまま実在の現れ光明燦然たる姿として現れてくるのです。『般若心経の新しい解釈』12ページ）

そして、空になった時、どのような心境になると言われているのでしょうか。五井先生は、人間神の子の実観という言葉で説明されています。

「あれこれと想いわずらったの後に行為に移すというのが、肉

体人間の今日までの在り方ではありますが、実は神の子の人間というものは本心本体の方からのひびき、つまり神のみ心のひびきとその瞬間瞬間の行為となって現われてくるもので、想念と行為とが離れてあるものではないのです。

しかし祈り心や行いをするときは、想念が祈り心そのままになっていきますので、神のみ心がそのままその人の行為として生活の中で現われてきます。そしてその場その時々々の利害というものを越えた、本来の幸福の為の神のみ心がそこに現われて来るのであります。（白光誌1980年5月号8ページ）

この人間神の子の実観では、想念の習慣性による先入観は、なくなり、すべてをありのままに受け入れることが出来るようになるのではないのでしょうか。

また、物事を善悪という二元対立で観るのではなく、悪いように見えるのは、神のみ心がまだはつきり現わされていない、つまり神のみ心の未開発のところ、悪や不幸のようなあがきを見せて、消えてゆく姿（開発されてゆく姿）であると観ることが出来るようになります。五井先生は言われているのです。

人間とは壮大なる使命を帯びた神の分霊（魂）

次に、この肉体界は神界（実在界）の現身（うつしみ）というが、このことはどういうことなのか、みてみましょう。それを解くヒントとして考えられるのが、「人間とは何者で、どこから来て、どこに行く」とい

ているのか」という五井先生の説明ではないでしょうか。

五井先生のお言葉から次のようなことがいえます。

人間は、親神様(宇宙神)につながっている直霊守護神守護霊であり、それが、動きだし、幽界に行くと、魂になり、もっと粗い波動になると、魄要素となって肉体になっている。そして霊魂が肉体界で働くうちに、魂魄要素に引きずられて、本来の自由を見失ってしまったところに、迷い(業)が生じて、現在の肉体人間となっている。

魂の方は肉体において種々の体験を経、霊界において分霊と合体し、ついには神そのものの直霊とも合一して、今度は守護神的働きをするようになるといわれているのです。

「魂(こん)というのはたましい、魄(はく)というのは肉体です。霊というのは神様そのもので、直霊守護神守護霊です。それが大神様につながっているわけです。その霊が動き出して、幽界に行くと魂になる。もっと粗い波動になると、魄要素といって肉体になる。霊魂魄となって、人間ができあがっているわけです。

しかし霊魂が肉体界で働くうちに、魂魄要素に引きずられて、本来の自由を見失ってしまったところに、迷い(業)が生じて、現在の肉体人間となっているわけです。(白光誌1967年5月号22ページ)」

「魂の方は肉体に於いて種々の体験を経、霊界に於いて分霊と合体し、ついには神そのものの直霊とも合一して、今度は守護神的働きをすることになるのです。神(直霊)は大神様という

わけです。(白光誌1955年7月号24ページ)」

「人間は皆神界に直霊がいて、肉体には靈魂魄として働いているのですが、それを知らないから神我一体にならないで、深い智慧が出て来ないのです。(白光誌1955年4月号23ページ)」

「人間の生まれ変わりというのは、霊が生まれ変わるのではなく、想念(魂)が幽界、肉体界と輪廻している姿なのです。ですからふつうの人たちが人間とみている者は、実は真実の人間ではなく、人間の想念をみているわけなのです。(白光誌1955年7月号26ページ)」

「人間は、霊としてはすべて神界に住んでいるのでありますが、想念(靈魂)として肉体をくわえた神靈幽の各階層に同時に住んでいるのです。あなた方がこの肉体界に住んでいて、種々な想いを抱きさまざまな行動をしている。

その想念や行動は幽界霊界神界のどの界からか、その想いを発しているのであって、死んで肉体を離れて初めて幽界なり霊界に往くということではないのであります。(白光誌1958年12月号6ページ)」

ここで言われている肉体での体験とは、肉体界に神性を顕現する、即ち愛と調和と美をこの肉体界に現わすこととされているのです。

このことを、肉体界は、神界(実在界)の現身(うつしみ)と表現されたと考えられます。

では、どのように神性顕現しようとしているのかというと、五井先生

は、「大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色とどうか、使命とどうか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊と私は呼んでゐる。この七つの直霊が各自のいのちを働かだし、互いに交流し合い助け合つて、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそつした一つの特色と、六つの補助的働きをもつて活躍している。人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となつて直霊に帰一していく道をたどつていく」と解説されています。

「神は大生命であり、大霊であります。この大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能とどうか、働きの特色とどうか、使命とどうか、ともあれ、七つの色に分かれたのです。これを七つの直霊と私は呼んでいます。この七つの直霊が各自のいのちを働かだし、互いに交流し合い助け合つて、この人類世界に、やがて神の世界を完成するわけなのですが、その過渡的現象として、現今のような乱れた不調和な世界が生まれておりますが、それもやがては、大調和世界を生み出す、一つの過渡的期間なのであります。

この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているのですが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特

色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそつした一つの特色と、六つの補助的働きをもつて活躍しているわけです。

『白光への道』71ページ」

「七つの直霊として働くが、これには皆神様の名があるのです。面倒くさいから名前をつけないのです。七色の光ですね。その中から分霊が出るわけです。

各分霊にいろいろの光が混ざっているのだけど、七つの光の要素が少しずつ入つて、アならアの光が一番強く入っている人もいれば、イならイの光が一番強く入っている人もある。そして一番強い光を中心にして、七つの光が調和していれば、そのひとは完全になつたわけなのです。(白光誌1962年9月号20ページ)」

人間に偉大なる使命を忘れさせた思い方

五井先生は、般若心経に示されている顛倒(てんどう)夢想について、次のように説明されています。人間が神様(直霊)から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様(直霊)への思い(感謝)を疎んじ、五感八感に感ずるもの他は無いと思つさかさまな考え方や、眞実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体といつ限定された器的、物質的なものと夢のような思い方であると。そしてこの思い方をしたため、業生、即ち神のみ心から離れた、誤る想念が生じたのであると解説されています。

「誤てる想念(業生)は、人間が神様(直霊)から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様(直霊)への想い(感謝)を疎んじ、五感六感に感ずるもの他は無いと思うさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方、顛倒(てんどう)した思い方をするようになったために生じたのです。(「新しい般若心経の解釈」14ページ)」

また、顛倒(てんどう)夢想の思いの仕方になったいきさつとして、次のようにも、説明されています。靈魂魄として三界(霊界幽界肉体界)に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、**肉体外の六官(直感)直覚(神智)の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心(精神)とは、肉体の機関が生み出した働きであるように、分霊の活動は分霊そのもの活動に感づられなく(てんどう)なっていく**と言われています。

「この霊・魂・魄として三界(霊界・幽界・肉体界)に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官(直感)直覚(神智)の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心(精神)とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていった。『神と人

間』25ページ)」

さらに、業想念(誤てる想念)が生じた原因として、五井先生は、「分霊(魂)が、地上界的な肉体身を纏っているため、本来は神の光の側にあるにもかかわらず、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまつたことにより生じたのです」と説明されています。

「この業というものは神がなくて現われたものではなく、間接的にはやはり神の力によって動かされているのでありますから、神がその必要を認めない時には、崩れ去るのであります。光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がない場合には、闇はそれ自身闇であることを自覚することはありませんが、ひとたび光がそこに放射され始めますと、光と闇との区別がはっきりついてまいります。そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけずつ、削り取られてゆく形になってきます。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とするのです。

ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上界的な性質をそれ自体が持つておりますので、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、未開発が開発されてゆく過程において、種々様々な動揺や変化が起こってまいります。

それを肉体人間が反動的に考え、かえって自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視して

しまったのであります。

この不安恐怖つまり神の光、靈性を離れた考え方が無明であるわけで、それが業想念の生まれた原因なのであります。(白光誌1958年5月号7ページ)

顛倒(てんどう) 夢想の思いの仕方によって生じた業生、即ち小さな範圍しか考えられない肉体我が張りめぐらしてしまった想念の波のさえずりにより、人間の一番奥深いところにある、体というより心といった方がよいところから、神の本来の智慧能力が縦に流れてきているのキャッチできなくなつたのじゃ。

「人間の一番奥深いところにある、体というより心といった方がよいところから、神の本来の智慧能力が流れてきているのであります。

それが縦に流れて来ているのを、肉体の頭脳をかけめぐる意識想念の、小さな範圍しか考えられない肉体我が、想念の波を張りめぐらしてしまつて、縦に流れてくる神智をさえぎり曇らせてしまうのであります。(白光誌1976年5月号31ページ)

顛倒(てんどう) 夢想の思いの仕方によって、誤てる想念(業生)は、あまりにたまひすぎると、自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れるのであつた。それを洗ひ浄めよといつて、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力が押しつけて、汚れが外部にだされしめられます。この汚れが取れてゆくと従つて、生命が輝いてゆくわけですが、この汚れの取れてゆく姿が、病氣や不幸や貧乏となるのじゃ。

「この誤てる想念(業生)は、あまりにたまひすぎると、自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れるのです。それを洗ひ浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。この汚れが取れてゆくに従つて、生命が輝いてゆくわけですが、この汚れの取れてゆく姿が、病氣や不幸や貧乏となるのです。(白光誌1963年7月号9ページ)

「この肉体界に神界の本体を現わす智慧

般若心経では、真言を唱えるだけで、空という心境を体得できるとなっていますが、その真言の意味は、「真理を明らかにせよ」であり、その真理とは、「この肉体界は神界(実在界)の現身(うつしみ)である」ということと、「顛倒(てんどう) 夢想を離れなければ、自由自在心は得られない」ということを表わしています。この真言を唱え、これらの真理を明らかにして実践して行けよということになるのではないのでしょうか。

では、五井先生は、人間が真に救われ、自分の天命を完つさせるとは、どのようなしたらよいかと言われているのでしょうか。これについて、教義「人間と真実の生き方」に簡潔・明瞭に示されています。

これまでの記述にあわせて、教義を理解しやすくなるように整理します。次のようになります。

(1) 私たち人間は何者であるかを知ること。つまり神の分霊であり、業生ではなく、常に守護靈守護神によつて守られてくること

ことを知るよう。

(2) 業生の正体はなにかを知ること。すべての苦悩は、過去世から現在にいたる誤るる想念(神のみ心からはなれた想念)が運命となって消えてゆく姿であることを理解すること。

(3) 業生から解脱する方法を習得すること。すべての苦悩をまえにして、必ず消え去るのであるという強い信念と今からすべてがよくなるという善念を起すという行を行うこと。

(4) 神のみ心にかなう生き方はどういう生き方を理解すること。いかなる困難があろうとも、自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛す、愛と真と赦しの言行をなすにつけてゆくこと。

(5) 業生を解脱する方法や神のみ心にかなう生き方も守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りをつづけてゆくことにより達成できるであることを、体験をもって理解すること。

(6) 以上のことをすれば、個人だけでなく人類も真の救いを体得できることを理解するよう。

まず、(6)の真の救いとは何かについて、五井先生は、それは魂の救われぬとして、業想念から解脱するようであり、また言葉を換えれば、神仏と自己との一体感を得る、そして、神と自己とのつながりをはつきり知った時に、救われが実現されると言われているのです。

(1)の人間とは何かについては、人間はどこから来てどこに行こうとしているのかの説明で既に紹介させていただいているので、ここでは、省略します。

次に、(2)の業生の正体についても既に紹介させていただいています。が、五井先生が説明されているものを見てみましょう。

「地上界をつくるには、想念というのには必要だったわけですが。その業想念は役を果たしたから、役者が舞台からひきあげるように、どんどん消えてゆくわけですね。だからそのまま放っておけばいいのです。ところが人間の想いというものは、放っておくという事はできないでしょう。そこでその思いを持って、世界平和の祈りの中に入れてしまおうわけですね。そうすると消えるのですね。(白光誌1961年2月号34ページ)」

「人間は現在現われている状態を、実際に今起きている状態と思いがちですが、現在現われている状態というのは、過去において人間の心の波の中にあつた状態が、今消えてゆくようとして現われてきているので、そうした消えてゆく姿を捉えてどうのこうのと言っている事は、ちょうど幻影をつかんで騒いでいるのと同じことなのです。

この原理を知ることが、宗教の極意でもあるのです。(白光誌1962年1月号11ページ)」

以上を整理してみると、次の通りになります。

地上界をつくるには、想念といつのは必要だったわけですが。その業想念は役を果たしたから、役者が舞台からひきあげるように、どんどん消えてゆくわけですね。だからそのまま放っておけばいいのです。ところが人間の想いというものは、放っておくという事はできないのです。

人間は現在現われている状態を、実際に今起きている状態と思いがち

なのです。現在現われている状態というのは、過去において人間の心の波の中にあつた状態が、今消えてゆくついでに現われてきているにもかかわらぬ、今消えた消えてゆく姿を抱えてゆく人間の言ひ、ちよび幻象をしかたなく齧つてゆく言ひなのです。そして新たな業想念をつくりだしてゆく言ひをもちます。

現在自分の目の前に現われているものは、実際に今起こっているのではなく、過去において、人間の心の波の中にあつた状態が今消えてゆくついでに現われているのであり、そのような実体のないものをいくら追い求めつても、新しい回びをたたくことは、なにもなはなないと言われているのです。

わらうといへば、業生は過去世から現在までの、神のみ心から離れた想念であり、人間が神性を現わす時に苦惱即ち感情想念(怒りや恨みなど)をとめない、運命として消えてゆくものなのです。先に触れました顛倒(てんどう)夢想の思いの仕方であらため、再び掴まない限り、その消えてゆく業生の影響は受けることがないと、五井先生は言われているのです。

神界に座を置く

(3) は、消えてゆく業生を前にして、どうすればよいかを示されています。

前述した業生が生じた原因のくだり(9ページ)を振り返ってみますと、「業想念(誤るる想念)は、分霊(魂)が、地上界の肉体身を纏っているため、本来は神の光の側にあるにもかかわらず、神の光が地球界の闇を

進んでゆくにつれて、種々様々な動揺や変化が起り、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまつたことにより生じたのです」となっています。これは、言い換えれば、業生を解脱するには、自分の現在の想念意識の座を神の光の側(神界)の側に戻し置くことがまず必要であるといわれているのです。

神界に座を置くとは、本心と業生の区別が可能になり、消えてゆく苦惱(業生)を再び掴まなくなり、すべての苦惱は必ず消え去るのであるという真理が働き出すのです。そして、それを強く信じるとともに今からやるのであるという善念を起すことは、積極的に自分の言葉、想念、行為にその真理を受け止め、現わすことにはなるのではないのでしょうか。

ここで、自分の現在意識の座を神界に置くということがいかに大切であるかについて五井先生のそのほかのお言葉をみてみましょう。

「人間の運命はすべて自分の想念行為がつくってゆくのでありまして、常に神のみ心の愛と調和の中に、自分の想いを昇華させておけば、行いも自ずから愛と調和になってゆき、周囲からも同じ行いが返ってくるのです。

しかし、自分の想念をいつも地獄絵の中においたり、この人類社会を悪や不幸の世界と思ひ込んでいたりすると、その人の運命は常にそういう状態になってしまうのです。

人間は神の生命エネルギーを基にしていろいろと想ひ行うのでありまして、その力が神の力でありながら、自分の想ひのままに善でも悪でも造りだせるのです。人間の運命は、すべて自分の想念行為の産物なのです。(白光誌1977年6月号6

ページ)」

「人間は亡くなったら霊界へ行ったり幽界に行ったりすると思っけています。本当はそうではないのです。肉体にこのまゝいながら、実は神界にもいれば霊界にもいれば幽界にもいるわけです。それでこの肉体は現身（うつしみ）として映っているだけなのです。自分の心のさまが、肉体に映って出ているだけです。その現身の器の中に霊要素も幽界の要素もあるわけです。

それで自分の想い、想念意識といひますか想念波動がどこにあるかによって、その人の住む境涯が決まるといつも私がいうわけです。（白光誌1978年8月号18ページ）」

以上を整理すると次のとおりになります。

人間は神の生命エネルギーを基にしていろいろと想い行うのでありまして、その力が神の力でありながら、自分の想いのままに善でも悪でも造りだせるのです。自分の現在意識をどこに置くかによって、人間の運命は決まるのであり、自分の現在想念意識の座を神界に置くことにより、神我一体の境地に達せるといわれているのです。

物質界の業生の波を超えている自分

（4）の神のみ心になつた生き方については、（3）と非常に関連性があります。

まず、赦すことについて、五井先生はどのように言われているか整理してみましよう。

「白光の教義に、自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す。という言葉がありまして、愛と赦しというように二つに分けてありますが、赦しというのちも、実は愛の心の一つの現われであるのです。しかし、こう二通りに書き現わさぬと、はっきりわかりませんので、二つにわけたわけです。

そこで、愛（おもいやり）寛容（赦し）この二つの心を、私は人類にとつて最も大切な心として教義に現わしているのです。

『愛・平和・祈り』13ページ」

「愛の心は、おもいやりという風にも現われますし、寛容・赦しというようにも現われます。

思いやりの心は、愛の心が細かい心遣いになつて、相手の想いの波に同調しながら光を入れてゆく、ということですから、こちらから相手の心の中に入れてゆくわけです。寛容の方は、相手の心の波、思いの波を、こちら側に受け入れて、自己の心の中で昇華させてしまうことです。

この二つの心があれば、たいがいの人は、その人に好意を持ち、その人の愛の心を受け入れると思ひます。『愛・平和・祈り』12ページ」

「自分を赦し、人を赦し、といひても悪業の想念行為を赦すのはありません。悪業の想念行為にからまれている、本心本体のほうの自分をあらためて、世界平和の祈りによって、思いおこさせるのでありまして、悪業の想念行為は、再びあつてはならぬものとして、消して去つてしまうのであります。悪業の想念行為をそのまま容認しておいては、消えてゆく姿も何もあつたもの

ではありません。

昔、念仏さえしていれば、死後の世界で極楽往生ができると聞かされて、日々南無阿弥陀仏を唱えながら、悪業をしていた、という話をよく聞きますが、これなど救いの宗教を誤って行っている、見本のようなものです。

(略)

この教義の中に書かれている自分というものは、神の分霊であって、業生ではありません。しかし、この地球界に肉体人間として生活していますと、どうしてもこの地球世界の物質波動にあわせていきてゆかねばなりません。ですから、霊界の分かれの自分であっても、物質世界でのやりとりの過去世からの業の流れが、いつも自分を取り巻いています。その業は、あなたも神霊の自分自身がつくったように肉体身の想いのほうからみえるのです。しかし、実際は、神霊の自分のほうは、生命エネルギーを出しているだけで、物質界の業生のほうが、そのエネルギーを力として、業生同志の和合をはかっているのであります。

神霊のほうの調和というのは、全く汚れもけがれもない調和ですが、物質界のほうの和合は、お互いの利害打算の妥協によって調和のようにみえているだけなのです。そういう妥協の姿勢は、神霊のほうに心をおいてみると、不潔な汚れたものであって、責め裁かずにはいられないような、真理にもとるものをもっています。ですから、どうしてもそういう他人の姿を責め、自分の心をも責め裁くことになってしまっています。

そのところが非常に問題で、今日までの宗教のあり方では、責め裁きつつ、真理に近づいていこうとしています。他人を責め裁くことを止めても、自分の心が終始責め裁きつけてゆきます。そういう心の姿勢は、他人を責めまいとしながらも、いつの間にか責めつけています。ですからどうしても、業の波がぐるぐる廻りをして、その人から離れてゆきません。

私は、それを本心から離してしまうために、消えてゆく姿という言葉を使って、そういう責め裁く想いを自分を取り巻く業の波のほうに向けたり、他人の業のほうに向けたりせずに、一挙に神霊世界に光明波動の中で消してもらうための世界平和のお祈りをしてゆくのであります。

この自分は物質界の業生の波を超えている自分、つまり本心の一つの現われということが出来ます。(白光誌1977年12月6ページ『自分というもの』)

ここで、自分を赦し、人を赦すことについて、整理をしてみましよう。自分を赦し、人を赦し、といっても悪業の想念行為を赦すのではない。悪業の想念行為にからまれて、本心を見失った自分(現在意識)に本心本体のほうの自分をあらためて、世界平和の祈りによって、思いおこせるのであり、悪業の想念行為は、再びあってはならぬものとして、消して去ってしまうのである。

また、自分を赦さない、即ち自分を責めることは、何故起きるのか、またいけないのか、そしてそれを乗り越えて行く方法を次のように説明されているのです。

神靈のほうの調和というのは、全く汚れもけがれもない調和であるが、物質界のほうの和合は、お互いの利害打算の妥協によって調和のようにみえているだけなので、そういう妥協の姿は、神靈のほうに心をおいてみると、不潔な汚れたものであって、責め裁かずにはいられないような真理にもとるものをもっている。ですから、どうしてもそういう他人の姿を責め、自分の心をも責め裁くことになってしまうのである。今日までの宗教のあり方では、責め裁きつづき、真理に近づいていくこととしている。他人を責め裁くことを止めても、自分の心が終始責め裁きつづけてゆく。そういう心の姿勢は、他人を責めまいとしながらも、いつの間にか責めつづけている。ですから、業の波がぐるぐる廻りをして、その人から離れてゆかない。五井先生は、そのところが非常に問題である」と説明されているのです。

そしてそれを本心から離してしまう即ち本心を見失った自分（現在意識）に本心本体のほうの自分をあらためて、思いおこさせるために、消えてゆく姿という言葉を使って、そういう責め裁く想いを、自分を取り巻く業の波のほうに向けたら、他人の業のほうに向けたらせず、「一挙に神靈世界に光明波動の中で消してもらい、の世界平和のお祈りをしてゆくのである」と言われているのです。

本源の世界の自分を愛する

次に自分を愛し、人を愛するということを次のように説明されています。

「自分を愛し、ということなのですが、ちょっとみますと、自

分を愛し、といいますと、先程から申し上げている、自己を空しくするとか、自己犠牲とかいう精神と全く反対の自己愛であり自我の心であるかと思われませんが、これは業因縁の自分、業生の自分を愛する、ということではなく、自分の本心を愛する、ということであります。自分を愛し、人を愛す、ということとはともに真理を愛し、神を愛する、ということなのです。『愛すること』80ページ」

「私のいう自分を愛しという自分は本源の世界の自分のことで、その自分というものは、本源の世界、神のみ心のなから、ずっとこの世までつながっている生命そのものなのです。

そういう本質的な自分を愛することは、そのまま他を愛する行為となり、他を愛する行為をする時に、その行為がそのまま自分を愛することになるのでありまして、真実に自分を愛することのできぬ人に、なんで他を愛することができるでしょうか。

真実に自分を愛するということができるでしょうか、ということを知るためには、自分を真実に愛しきってみなければならぬのです。自分の命を粗末にし、自分の精神や肉体を損なうような行為をしていて、人のためとか、人を愛するとかいっても、それは神のみ心に叶った行為とはいえないのです。

自分を愛するということは、自己の生命が神より分かれたものであることを認識して、素直に正しく生かすことにあります。生命が素直に生きている状態というのは、精神に扱われがなく、肉体が欲望に縛られることがなく、自由自在に生きていられる状態です。自己の肉体生活の欲望を満たすことや、単なる

感情を満足させることが自分を愛する状態であると思ったり、人の感情や生活を損なわせても自分を守ろうとすることが、自分を愛することだと思ったりすることが、自分を愛することだと思ったりすることは誤りなのです。『愛すること』81〜82ページ「

以上を整理しますと、次のとおりになります。

五井先生の言われる、自分を愛するという自分は本源の世界の自分のごとで、その自分というものは、本源の世界、神の心のなから、ずっとこの世までつながっている生命そのものである。そういう本質的な自分を愛することは、そのまま他を愛する行為となり、他を愛する行為をする時に、その行為がそのまま自分を愛するようになるのであると書かれているのです。

実在世界の神の元へくだりしける言葉

五井先生は口頭の言葉や想念をこのように使い、発して行けばよいことを示されているものを紹介します。

『著書』霊的な存在としての人間』の中で、「日々使っている言葉や想念波動を通じて、実在界の言(光)の中に昇華してゆくように」と次のように解説されています。要約・整理したものをみてみましょう。

聖書ヨハネ伝に「太初(はじめ)の言(ことば)あり、言(ことば)は神(かみ)と偕(とも)にあり、言(ことば)は神(かみ)なりき。この言(ことば)は太初(はじめ)に神(かみ)とも在り、万(よろず)のものこれに由りて

成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命(いのち)あり、この生命は人の光なりき」の行があります。

この行の中にある「この言(ことば)は、一口で言えは、ひびきであり、光の波動であり、この宇宙創造を成し遂げていたのであり、現在も成し遂げつつあると書かれているのです。そして、「この言(ことば)が現象世界、枝葉の世界に降ってくる」と、言葉となってくる。この言葉の世界は想念波動の世界と、普通使われる、人間の声を振るわせて出てくる言葉の世界との二種あり、この二種の世界は別々に活動している時と同じ世界で活動している時とがある。これらの世界は、言(ことば)が実在の世界、光明そのものの世界とすなわち、現象の世界と一つこととなる。人間はどこらの世界でも活動していると言われているのです。

想念波動と言葉の世界から、言(ことば)の世界へ自己の意識を投入してしまふ。即ち想念や言葉の世界を空にして、無為に、神様に全託するようになって、真実の言(ことば)、光そのものの言(ことば)が心身から溢れて出てくる、即ち実在の世界の様相そのものが、その人の心身に現われて、神仏そのものの人格になっていく、というのが宗教の極意であり、それが釈尊の空、老子の無為、浄土門やキリスト教の全託の境地と言われているのです。

そして、私たちが毎日使っているこの言葉というものの中には、想念波動のひびきも、実在界の言(ことば) 光(ひびき)も混じっており、得てして人々は、汚れた業想念波動の言葉を使いたがるが、せっかく神様が、光輝く平和な実在界を言(ことば)のひびきをもつてつくって下さっているのだから、私ども人間は、日々使っている言葉や想念波動を通じて、実在界の言の中に昇華してゆく必要があるとして、また、

実在世界に、言葉や想念の元になる光明そのものである言（ことば）があるということは、有難いことで、善い言葉や、善い想念をたどってゆけば、実在世界の神のみ元にたどりつけるとして、具体的に昇華していく言葉使い方を示されています。

あの馬鹿野郎という言葉や、あの人の天命が完つされますように、と変えてゆき、この世に平和などとてもこない、地球はもう駄目なのだ、という想念波動を、悪いものはみんな過去世の神のみ心を離れていた誤った想念行為の消えてゆくために起こっていることなのだ、消えてゆくに従って必ずよい地球世界になってゆくのだ、というような明るい想念になって、世界平和の祈りの中にもってゆく、というように、実在界の光明につながってゆく生き方を示すことが大事である。

それには常に、言葉の使い方や、想念波動の在り方に気をつけて、常に常に、神のみ心に叶う、言葉を使いや想念波動にしてゆかねばならないと言われているのです。

現在の想念意識を守護霊守護神に向ける

(5)の業生を解脱する方法や神のみ心になう生き方も守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りをつづけてゆくことにより成就できるものであることについて、みてみましょう。

業想念波動の輪廻は大変厳しく、想念意識だけが自分であると思いついてしまった人間にとって、これまでの業生を解脱する方法や神のみ心になう生き方はなかなか理解できなかったといってもよいのではないのでしょうか。

そのことについて、五井先生は次のように言われています。

「空になれとか、無為になれとか、把われを放てとか言っても、業想念波動の輪廻はちょうど、録音盤に録音されてめぐっていきながら、中から押し出されて想えてくるのだし行為になってくるので、なかなか先駆者の言うように空にも無為にもなれないのです。（白光誌1966年10月号7ページ）」

「分霊が肉体の因縁の中に閉じこめられた現在、各分霊だけの力でこの因縁を越えることはなかなか容易なことではない、というより不可能に近いことを思わせる。何故ならば、一度発した念は必ず、その出発点に戻って果となり、因果の波は時を経るにつれてしだいにその層を厚くし、分霊の肉体我を牢固としてぬくべからずものにしていったからである。肉体我は粗い波動の波が起こしている自我であり、肉体という物質によって、自己と他とを区別しているものであって、まず各自が己れを守ろうとする意識を起こすため、どうしてもお互いの利に反することが起こると、その利を守るために争わざるを得なくなる。ましてこの分霊が陰陽に分裂して男女となり、肉体人口が増えるにつれて、肉体我は自己と自己の一族のみを守ろうとし、いよいよ業因を深めてゆき、この業因の隙間から神の光が差し込まぬ以上、人間は本来の真性に目覚め得ぬような状態になっていった。『神と人間』27ページ」

「業想念というもの（波動）は、個々人の肉体、幽体を急転回していると共に、人類世界（肉体界幽体界）をも、急激に転回しているものでありますから、肉体界の自己自身の力だけでは、

なかなかその転回(輪廻)の中から抜け出すことがむずかしいのです。

業想念波動の転回は、幽体(潜在意識)から肉体(顕在意識)へ、肉体から、幽体へと烈しく廻っているので、幽体(潜在意識)にひそんでいた想念が、他の人や事件の同じような想念にふれると、ひょこつと肉体意識に顔出して、怒りの感情がこみあげてきたり、悲しくなったり、妬ましくなったり、高慢になつたり、各種の欲望となつたり、意地悪い感情が現われたりするのです。

そうして、こうした感情はとめようとしても、生半可の意志力では跳ねかえされてしまうほど、烈しい勢いをもつていて、肉体の言語動作に現れてしまうものです。たまたまこの感情を意志力で抑えきることが出来ても、それはその感情が消え去つたのではなくて、中(潜在意識)に抑圧されただけであつて、後から後から突きあげてくる想念の為に、いつかはその数倍する力で肉体の言語動作に現われたり、またそれを抑圧していると、その業想念は、運命の不幸、病氣や、事業の失敗として現われてくるのです。

意志力で業の想念(感情)を抑えることは、なかなか立派なことであり、必要でもあるのですが、それだけでは、その人の運命は真実に善くならないし、魂が浄まり、業想念が減じたということにはならないのであります。(『靈性の開発』29ページ)

そして、この難問を解決する智慧と方法として、五井先生が、人間と神とのつながりをはつきり知り、現在の想念意識を守護霊守護神に向け、ひ

たすら感謝して行けば、守護霊守護神の光により業生(業想念)の世界から離脱し自由になり、そのことが可能になると教えてくださっているのです。

「人間が、自己の運命を改善し、幸福になりたいとするならば、ただ、守護霊に自己の運命を委せればよい。(略)この心でいれば、その人の行動はおのずから、調和した整ったものになり、生活は楽しく楽になるに決まっているのである。なぜならば、守護霊、守護神、と真つ直ぐにつながり、そのつながりによって、その光によって、業生の因縁因果の渦巻きからいつの間にか離脱でき、分霊本来の光が直霊(神)につながり、肉体をもつたままで、人間神の子の実観を、真に体得できるのである。(『神と人間』55ページ)」

ここで、守護霊守護神の働きについて、五井先生がどのように言われているかあらためてみてみましょう。

「人間というものは、肉体としては被造物の側に、あるのですが、靈性としては造物主の側にあるのです。そして、靈性の側の人間というものは、内面的に直霊、分霊、外面的には守護霊、守護神として宇宙の運行にたずさわっているのです。(白光誌1961年12月号8ページ)」

「微妙なひびきを持つ、縦の面の神々の働きは、心の働き、つまり精神面として靈魂的な働きとなり、大きな振幅の波動を持つ、横の面の神々の働きは、魄的、つまり物質面の働きとなつて現われているのです。今日の人間のほとんどが、この縦横十

字の波動の調和がなされていないので、完成された人間としての、安心立命した生活を営めずにいるのです。

世にいう大聖とは、縦横十字の波動の調整がなされていた人なのであります。人間の縦横十字の働きが完全になるために、その交叉の中心に私が説いております、守護の神霊の救済の光明波動が、放射され続けているのであります。今日までこの真理は、ほとんどの人が知らないであります。(白光誌1962年8月号8ページ)

「神は分靈魂の分生命の人間だけでは、この物質界の粗い波動の中で、神の子の完全性を現わすことが出来ぬのをご承知で、人類が物質人間としてこの世に住みついた頃合を計って、人類の上に守護の神霊をつかわし、分靈魂、守護霊、守護神と一つにつながって、神本来の完全円満性を、この地球界のうえにも、現わし得るように計画されたのであります。(白光誌1961年5月号8ページ)」

「神(直霊)としては人間内部にいらながらも、真理をわからせようとして、自らが分かれて守護神ともなり守護霊を創って、外面的に人間に智慧を与え力を与え、業から守っているのです。(白光誌1974年3月号8ページ)」

「一人で生きていると想っているけど実はそうじゃない。神の生命そのままの直毘(なおり)から肉体の内面側と外面側にわかれたのです。内面側は肉体の中に分霊と魂として入り、一方の外面側には、大神様のはじめからの計画で守護霊と守護神に守らせることにしたのです。守護霊守護神として働いている力が9

0%、肉体側の分霊と魂の力というものは、わずか10%なんです。(白光誌1964年5月号15ページ)」

「各人を守っている守護の神霊が、さまざまな環境に各人を置いて、その人が永遠の生命を一日も早く、自己のものにできるような経験を与えるのであります。そういう経験を過去世から種々と与えられながら、人間は成長して行くのであります。(白光誌1967年1月号5ページ)」

「消えてゆく姿の先は、神様のみ心の中ですね。だから神様にすべてをお任せしてしまうことは、消えてゆく姿とおなじです。ただ消えてゆく姿といっても、神様がないと消えてゆかないのですね。守護霊守護神があり、大神様がないと消えてゆかない。なぜ消えてゆかないかというと、三界をグルグル横に回っていて、あいつは憎らしい奴だ、ああいけないのだと思っても、ただそれだけではその想いは消えない。

それをどうするかというと、守護霊さん守護神さんありがとうございますと、今まで横に回っていたものが、縦にスーッと上に、神様の中へ入ってそこで消される。そうすると、その回っているものがだんだん少なくなる。消えてゆくに従って、本心の光がどんどん開いてゆく。(白光誌1971年2月号17ページ)」

以上を整理すると次のとおりになります。

神は、分靈魂の分生命の人間だけでは、この物質界の粗い波動の中で、神の子の完全性を現わすことが出来ぬのをご承知で、人類が物質人間と

してこの世に住みついた頃合を計って、人類の上につかわされたのが、守護の神霊であり、分霊魂が守護霊、守護神と一つにつながって、神本来の完全円満性を、この地球界のうえにも、現し得るように計画されたのであります。守護霊、守護神は一体となって、さまざまな環境に人間各人を置いて、その人が永遠の生命を一日も早く、自己のものにできるように経験を与えおられるのであり、そのため業から人間を守るために、絶大なる智慧を与え力を人間に与えてくれているのです。

個人人類同時成道の背景

(6)では、個人と人類が同時に救われる(同時成道)するというのはどういう意味なのか整理してみましょう。まず、五井先生がそれについてどのように言われているかみてみましょう。

「この教えは観念論ではありません。最も現世的な現実的な、自分が霊肉共の救われを体得できると共に、世界人類をも同時に救ってゆくという、個人人類同時成道の、今日現われなくてはならぬ教えとして、現われてきた教えが、世界平和の祈りであり、消えてゆく姿の教えでもあるのです。

私の提唱以前にも、これに近いことを言っている人達もあつたのですが、その人達はこうした、すつきりした教えとしての完成を見ず、他の教えの面に走ってしまったのですが、今はついに末世における最大の易行道として、この世界平和の祈りが、はつきり提唱されたのであります。(白光誌1960年4月号11ページ)」

「今日のように地球人類の最大危機になってまいりますと、個人個人の小さな欠陥の修正よりも、人類全体の欠陥の修正の方が大事なのです。

ですから神さまのみ心は、個人個人の小さな心の傷はどうでもいいから、大きな傷の修正の方に、各自の精神エネルギーを使ってくれ、という御心で世界平和の祈りによる人類救済の道を開かせたのであります。

そうして世界平和の祈りをやっていると、大きな傷の修正になると同時に、いつのまにか自己の心の傷も全快してしまっているのです。(白光誌1960年11月号10ページ)」

「世界平和の祈りの中には、自分の幸せと人類の幸せとが同時にあるのです。“世界人類が平和でありますように”という時には、自分の業想念が光輝く救世の大光明の中に入って、自分が浄まると同時に、世界人類に光明は同時に送っているのです。(白光誌1964年9月号21ページ)」

「今までの聖者は、あくまでも人間個人の心境の磨きに、すべてをかけていたようです。ところがそれだけでは世界は平和にならない。世界の平和を願って個人を願って個人を度外視しても、それではやはり平和にならない。

どうしても個人人類同時成道でないと、永久に救われないのです。そこから始まったのが、世界平和の祈りの運動なのです。

(白光誌1966年11月号50ページ)」

「神は援助の力としての守護の神霊の大光明を、人類世界に放射しようとなさっているのです。放射しますが、その放射する道は肉

体人間の側からつくらねばならないのです。

そしてその道を作る為に、自ら神との一体観を如実に体験した、肉体人間が必要であったのです。

神はその肉体人間をして、外部からの呼びかけとして世界平和の祈りを提唱させ、各自が世界平和の祈りをひとたびでも祈ることによって、外部から内部に向かって、業想念を突き破る光の道が作られたのです。

その後はその道を通して、外部からの働きかけとして働いてられる守護の神霊の光明が、内部に本来性としてある、神の子人間の本心の光と一つにつながって天地一体、神我一体の働きとなり、人々は自己の本体を自覚してゆき、自己の天命を完うしてゆくことになるのであります。

ですから、世界平和の祈りを一度なしたる人は、その内部に世界平和の祈りは鳴りひびいているのである、という説明をしたのであります。(白光誌1959年6月号21ページ)

以上を整理しますと、次のとおりとなります。

この消えてゆく姿で世界平和の祈りは、現在の地球人類の大危機を乗り越えるために、神が援助の力としての守護の神霊の大光明を、人類世界に放射しようとなさって開かれたものである。その放射する道は肉体人間の側からつくらねばならない。そしてその道を作る為に、自ら神との一体観を如実に体験した、肉体人間が必要であり、神はその肉体人間をして、外部からの呼びかけとして世界平和の祈りを提唱させ、各自が世界平和の祈りを一度でも祈ることによって、外部から内部に向かって、業想念

を突き破る光の道が作られたのである。その後はその道を通して、外部からの働きかけとして働いておられる守護の神霊の光明が、内部に本来性としてある、神の子人間の本心の光と一つにつながって天地一体、神我一体の働きとなり、人々は自己の本体を自覚してゆき、自己の天命即ち、この肉体界に愛と調和と美の世界を顕現するという使命を完うしてゆくことになる。と五井先生は言われているのです。

悪因縁を善因縁に変える宇宙子科学

これら智慧(真理)の理解により、日常どのように実践してゆけばよいか具体的に分かってきます。

さらに昌美先生によって宇宙子科学の智慧として開かれた「我即神也」や「人類即神也」の印は私たちの真実の生き方を後押ししてくれます。

それは、私たちの意識を、容易く神界の座に置ける智慧だからです。

昌美先生の著書『我即神也』によりますと、この智慧は昌美先生が長年宇宙子科学の研究に取り組まれ、次元交差という厳しい霊的修行により、自らを癒し救い導く智慧や叡智が無い人々のために、この肉体界(三次元世界)に下ろされたものなのであります。

この肉体界(三次元世界)は、業想念の渦巻く世界、因縁因果の法則で律せられた世界といえましょう。五井先生のみ教えでは、消えてゆく姿で世界平和の祈りにより顕在意識の座を神界に置くことにより、魂の業想念からの解脱を実現していったのであります。この智慧では、三次元の世界をやや超えて踏み込んだ四次元の世界において自らの因果

律を操作し、自ら組む『印』によって過去に放った悪因を自ら消し去り、また悪因縁を善因縁に変えることができるものなのです。そして、組む人の頭在意識の座が幽界の世界にあると、正しく『印』を組んでいれば、それは可能であるという科学なのです。この印を組む人を真っ暗闇の部屋に電灯のスイッチをいれる人に例えて、解説されています。電灯のスイッチをいれ、明るくなつてから、光が燦然と灯された安全な場所、ゆつくりと自分自身を磨き高めあげてゆけばよい、少しずつ次第に神人としての光輝いた姿を、この一人一人の肉体(器、媒体)に顕してゆけばよいとされたのです。

また、呼吸法により、宇宙の生命力、気、パワーを呼吸し、それらを直接、自分の肉体を構成している細胞の中に取り入れることで、調和した肉体を維持してゆくものであるとともに、その呼吸の真のあり方を体得できれば、苦悩も病気も老化もなくなるのである。それを我々が自覚することにより、「気」(宇宙子)は自然に自らの生命を維持してくれ、かつまた、病気を癒してくれるのである。そして、この呼吸法によって、自らの意識を宇宙神と一体となることに集中させ、限りなく沢山の光、たくさん生命エネルギー、パワーを体内に吸い込むことができるようになる。この呼吸が祈りそのものになり、この祈りを通して天と強く結ばれていき、自らの神聖性を自覚めさせ、その本来の無限なる能力を発揮せしめてゆくと言われています。

自らの直観力を磨き、チャクラを開く

毎日のご神事を通して、何をめざしていけばよいのでしょうか。神性顕現をめざしていくのですが、具体的に何をすればよいかについて、昌美先生は、次のように教えてくださっています。

まず宇宙神と直接に交流し、五感を超えた感覚(ひらめき)である、自らの直観力を磨き、本来の力を取り戻し、自らの肉体を開発する(チャクラを開く)ことによって、自らの生命力を高めあげる。

自らの直観力を養うには、自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せくくるので、祈り、自らの想念を浄める必要がある。そして、否定的観念、暗黒的想念の波動を見極める力を身につけること。言い換えれば、神の叡智をキャッチできるようになる。

そのためには、まず日頃の自らの想念のあり方、言い換えれば日頃の生き方が大事であると次のように説明されています。

「日頃の想念こそ、自分の人生を左右する、幸、不幸を分かつ一大原因なのです。

人類にとって物が何で必要なのでしょうか。物そのものが必要であると同時に、物が完成するそのプロセスがもっとも大切である、ということを知り、物を完成させるために、教えるために物が必要となるのです。

すべての物事において、原因はもとより、プロセスもまた結果を左右するということに気づいてゆかねばなりません。プロセスそのものも結果を導いてゆくのです。一瞬一瞬の想念こそが自分の人生そのものであることを知らねばならないのです。

否定的想念や言葉は、これからは死語にしなければならぬのです。それを人類一人一人が完全に守れば、自然破壊や天変地変は避

けられます。一人一人が自分の想念に責任を持って、世界は必ず平和になるのです。

一瞬一瞬のプロセスに愛があればよいのです。愛を与え、感謝を注げば、それで充分なのです。決して難しいことではありません。大変なことでもなければ、面倒なことでもないのです。ただただ自分の語る言葉に愛を与え、感謝を注ぎ込めば、すべては完璧にうまくゆきます。完全に調ってゆきます。幸せで、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくるのです。『次元上昇』108ページ」

すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていけば、すべては完璧にうまくいへ。幸せで、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくると言われています。

否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らが放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けないと断言されているのです。

「真理に目覚めたものは必ず救われます。なぜならば、そういった否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が大いに養われているからです。そればかりではなく、自らが放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けません。自らの放つ想念、光、エネルギーにより、自らの運命が悪くなるのを見事に完璧に妨げるのです。」

『次元上昇』100ページ」

すべてが神性を顕現するプロセス

業想念を解脱し、神我一体即ち人間神の子の実観を体得した時、私たちはどのようにこの肉体世界を観ていることでしょうか。

釈尊が般若心経の中で示され、五井先生が正しく解釈された世界、「現象世界の仮相の色(もの)の世界が、すべて光明燦然たる実在、宇宙に満ちる存在の種種なる使命的光(色)として存在してくる」のではないのでしょうか。即ちすべての人たちが業生の多い少ないは関係なく、それぞれ使命を持った神の子として、存在してくる、そして、神界では兄弟姉妹であり、それぞれ神性を現わすためのいろいろな経験・修行を積んでいるのであるという認識が愛おしい感情となり、お互いに対して感謝と尊敬の光りとなり、接している人と自分を包むことになるのではないのでしょうか。別な言い方をすれば、すべてが神性を顕現するプロセスとして存在しているのであり、それを肯定・感謝して、受け入れている自分を発見しているのではないのでしょうか。

以上般若心経と五井先生のみ教えとの関連性をみてきましたが、般若心経の神髄は、五井先生のみ教えに引き継がれていることがわかります。五井先生のみ教えでは、般若心経の神髄である「色即是空、空即是色」を「消えてゆく姿、神性顕現」という概念で示され、地球人類最大の危機を迎えている今日、私たちがその神髄を容易く実践できるように、「神と人間のつながりの在り方を解説されている」といえるのではないのでしょうか。